

自己開示場面における 「なんか」の即興性

Improvisation: From the Use of *Nanka* in Self-disclosure

杉 崎 美 生

SUGISAKI Miki

[要旨] 本稿では、話し手が聞き手に対して自らのことを語る自己開示場面に着目し、そこで頻繁に用いられる「なんか」という語のコミュニケーション上の働きについて考察した。「びっくりしたこと」をテーマとした会話コーパスをデータとし、そこから得られた395例の「なんか」について、共起する表現を分析し、その特徴を考察した。自己開示場面において発話される「なんか」は語りの中で新情報 (Chafe 1994) を示す際に用いられ、話し手の心内発話などと共起し、臨場感あふれる表現を作り出していた。また、過去の出来事をその場で思い出しながら語るという即興的な場面において発話されることから、「なんか」は「自分の話そうとする話が、このようなものでいいのだろうか」といった躊躇や、「正確ではないかもしれないのだが」といった不確かさなど、多様な語用論的意味を聞き手に示すことに貢献していた。このような点から、従来、フィラーとして取り上げられることが多かった「なんか」は、単に発話と発話を埋めるための語ではなく、その場で作り上げられる語りを先導しつつ、不確かさなどの話し手の認識を示すという、コミュニケーション上の重要な働きを担っていると考えられる。

[キーワード] 「なんか」、心内発話、自己開示、即興性

[Abstract] This paper attempts to show how the speaker uses the word *nanka*, which is one of the most frequently occurring words in Japanese conversation. By focusing on self-disclosure, a process of communication in which one person reveals information about oneself to another, *nanka* is analyzed from the point of view as a function in communication. The data used in this study is collected from “Mister O Corpus,” a cross-linguistic video corpus about conversations. 26 pairs of female participants talk about the topic, “what surprised you most?” for about five minutes. This data includes 395 examples of *nanka*, and these examples are analyzed based on co-occurrence expressions. Most examples reveal that *nanka* works as a marker to introduce “new information (Chafe 1994)” and spontaneous expressions such as speakers’ inner speech, onomatopoeia, and citing third party utterances. In addition, *nanka* shows a variety of speakers’ meanings such as hesitation and uncertainty, depending on the context, because these spontaneous expressions that *nanka* introduces are not necessarily accurate. Therefore, the speaker tends to show her concern over whether her own speech meets the requirements of the task or satisfies the listener by using *nanka*. Moreover, disfluencies, such as various pauses or unclear pronunciation, often occur when the speaker narrates past events with *nanka*. The speaker expresses her pragmatic meanings by including some type of improvisations in her utterances. Consequently, *nanka*, which has been depicted as a mere filler, introduces on-going interactions in an improvisational way and works as a cue to show the speaker’s cognitive mode, such as hesitation or uncertainty, to the listener in social interactions.

[Key Words] *nanka*, inner speech, self-disclosure, improvisation

1. はじめに

「なんか」という語は話しことばにおいて頻繁に用いられる語である。実際に行われている会話をみると、この語があまりに会話に頻繁に現れることから、しばしば、そのコミュニケーションの形は曖昧であると感じられることもある。このような「なんか」はこれまで、発話と発話をつなぐための特に意味を持たない語、フィラーとして分析されることが多かった。しかし、この語がどのような語であるのか、なぜ頻繁に使われるのかについて、未だ明確な定義はなされていない。本稿では、会話データから「なんか」の使用例を取り上げ、共起する語や表現などの言語学的特徴を観察、分析し、会話参加者がやりとりを生産していく中で、この語がどのように用いられているかを明らかにする。また、「なんか」の発話される環境が、話し手と聞き手の即興的なやりとり⁽¹⁾に關与していることを示す。

2. 語源と辞書的用法、および先行研究

2.1 語源と辞書的用法辞書

「なんか」は元々、不特定なものを指し示す代名詞「なに」に助詞の「か」がついた連語であり、その語源的な意味は「不確かさ」である。音韻変化を経て「なんか」と発音されるようになった。現在使われている「なんか」の文法的形式には、大別すると以下のような二つの用法がある。

①代名詞「なに」+副助詞「か」 感覚・願望などの内容がはっきりしない事物をさす。

「一がありそうだ」「お茶か一飲みたい」

②副詞「なに」+副助詞「か」 はっきりした訳もなく、ある感情が起こるさま。

どことなく。なんだか。「一気味が悪い」

(『日本国語大辞典』『大辞林』第二版より作成)

①の代名詞的用法は、「なにか」と置き換えて意味が変わらないものであり、②の副詞的用法は「なんだか」「なぜだか」などの語と置き換えられる。

2.2 先行研究

先行研究では、「なんか」の使用例を挙げ、それぞれの機能を分析したものが多い。田窪・金水(1997)では、「なんか」を言いよどみの語であるとし、会話の中で使われていく中で、元々持っていた指示機能を失い、「だいたいこんな感じ」という心的状態に対応する形式になってきたと考察している。鈴木(2000)では、田窪・金水(1997)の研究に具体的な検証の必要性を指摘し、相互行為に「なんか」がどのような影響を与えているかという観点から、会話例をデータとして用い、分析を行っている。そして「なんか」の持つ、発話内容の暗示(変化の予告や強調)機能、話し手の発話内容への態度を曖昧にする機能を説明し、この語の多機能性を考察している。さら

に、内田(2001)は、「なんか」にnew concept (Halliday 1994, Chafe 1994)が続くことを指摘し、その働きをそれぞれ、①話題開始、②話題の発展、③発話内容の具体化、④次の部分へのつなぎ、⑤引用、⑥話題対象への評価と定義している。また、この語の使用を過去まで遡り、その機能的変化の様子から、「なんか」の語義が文法化(grammaticalization)を辿っていることを説明している。飯尾(2006)では、短期大学に通う学生の会話をデータとし、「なんか」が使用される位置とその機能について分析を行っている。その結果、辞書に掲載されている語彙の意味に加え、この語が①話題の開始(turn initiator)、②フィラー(filler)、③和らげ(softener)などの機能を持つことを指摘している。また、「なんか」のイントネーションについても分析し、その特徴が機能を分類する上で重要であることも示唆している。

2.3 研究の目的

先行研究では「なんか」の機能を取り上げるものが多く、特に「発話を和らげる」「曖昧にする」などのフィラーとしての機能が度々研究されてきたことが伺える。確かに実際の会話において用いられる「なんか」を観察すると、先行研究で取り上げられてきたいくつかの機能を有しているように思われる。しかし、多くの機能が指摘される一方、実際に発話される「なんか」の使用を考えてみると、実に多様な位置に、そして様々な意味合いを持ちながら(もしくは意味合いを持たず)存在していると言え、すべての「なんか」に一つ一つの機能を当てはめ、その使用を証明することは困難であるようにも思われる。話し手が「なんか」を用いて聞き手に何らかの働きかけをするという考えのもと、これまで分析が行われてきたと考えられるが、そのような機能があるとすれば、発話を和らげ、曖昧にする必要性のあるコンテキストの中で「なんか」が使われるということになる。聞き手との相互行為の中でどのような場面がそのような必要性を生むのかについても考える必要があり、聞き手の反応をも考慮し、ディスコースの中でこの語の働きを分析することが重要であると考え。つまり、「私たちはなぜ「なんか」という語を発話するのか」という、その使用の根底にある動機付けを説明しなければならないであろう。このような点から、本稿では「なんか」という語の用法を分類し、各用法の分布を調査することは目的としていない。事例分析を通して、「なんか」が発話される場面、聞き手の応答、そして共起する言語表現を観察することから、「なんか」の相互行為上の働きを明らかにすることを目指す。

3. データ及び本研究の対象

データは初対面の女性参与者たちによって収録された、「ミスター・オー・コーパス⁽²⁾」を使用した。これは二人組の女性参与者に「びっくりしたこと」をテーマに語ってもらい、録音された5分間の会話データである。対象データ数は日本語会話26例(先生・学生ペア13例、学生・学生ペア13例)であり、その全ての会話の中で「なんか」は、395例発話されていた。

参与者二人はそれぞれ、自身の「びっくりしたこと」を話すことが求められるが、それぞれのエピソードの開始の部分では、「(二人の参与者のうち)どちらから話すべきか」、もしくは、「どのような話を話そうか」といった相談を二人で行うことが多く、その際、「なんか(びっくりし

た話) ありますか」とお互いに発話する傾向がある。この「なんか」は上記2.1で述べた代名詞的用法の「何か」と同様の働きをしていると考えられるため、このような場面は本稿では取り上げない。どちらか一方が話し手となり、エピソードが始まると、「なんか」は様々な場面で発話されることとなる。この中には、辞書的な意味だけでは説明できないような「なんか」が含まれている。本稿では、話し手が自らの体験を語り出す自己開示場面に着目し、そこで発話される「なんか」に焦点を当て、共起する語や表現を観察し、コンテキストと共に詳細に分析を行うことから、話し手が「なんか」を使ってどのようなことを表現しているのかを探る。

4. 分析

本章では、データの中から4つの事例を見ていきたい。事例1では、話し手が出来事を詳細に語る部分や、自分の感情を思い出しながら語るときに「なんか」が見られる。

事例1：話し手Rはアルバイトからの帰り、夜遅くに満員電車に乗った時の出来事を話している。

Rはエピソードの中で度々「なんか」と発話している。

- 01:R: その日バイトで
 02:L: うん
 03:R: 夜遅くって=
 04:L: =うんうん
 →05:R: **なんか**、すごい電車も混んでて=
 06:L: =う [んうん
 07:R: [あ、疲れた、やだとか思って {笑い} =
 08:L: =うん {笑い}
 い|
 →09:R: で、混んでるなあと、すごい、**なんか**、席も座れないし=
 10:L: =うん
 →11:R: でも、**なんか**、途中の [通過駅で
 12:L: [うんうん、うん=
 →13:R: = {咳払い} **なんか**、あたしの、こう、で、電車
 のつり革に、つかまって [て、あたし
 14:L: [うんうんうん
 →15:R: で、**なんか**、それで
 16:R: で、目の前の人が [、立ったのね
 17:L: [うん、うん
 18:R: あ、やった、座れると思って=
 19:L: =うん=

- 20:R: = 席空いた と思って、座ろうとしたら
 21:L: うん
 →22:R: で、なんか、女の人が
 23:L: うん
 24:R: 若い、20代後半ぐらいの女の人が
 25:L: うん
 26:R: 走ってきて=
 27:L: = うん
 →28:R: なんか、私の座ろうとした席 [に
 29:L: [うん
 30:R: いきなり座っ [て
 31:L: [ええ=
 32:R: = あ、取られちゃった、とか思って [笑い]

(J10 : 10-41)

話し手Rは1行目のエピソードの開始部分で、その日の状況（夜までアルバイトをしていたこと）を語り、5行目でその時電車が混雑していたという事実を説明し、自分が語ろうとする「びっくりしたこと」が起こる場所（混雑した電車の中）である新情報（Chafe 1994）を示すときに「なんか」と発話している。その後「あ、疲れた、やだ」(7行目)と、その時の感情を直接話法で表現している。また、9行目で「混んでるなあ」とその時の気持ちを吐露した後、今回のエピソードを語る上で重要なポイントとなる「席がない」という新しい情報を、「なんか」と共に発話している。11行目では「途中の通過駅」と発話し、びっくりした出来事が正に起こる「途中の通過駅」を新情報として提示し、13行目では「なんか」の前に咳払いをして、「あたしの、こう、で」とことばに詰まりながらも、自分がどのように電車に乗っていたか（つり革につかまっていた様子）を「なんか」と共に表現している。その後、15行目で「なんか」と発話した後「目の前の人」を登場させ、16行目ではその人が立ち上がった状況を伝えている。そしてそれを受けて、18行目で、「あ、やった、座れる」、20行目で、「席空いた」と心の中で感じたことを直接話法で語っている。さらに、22行目で「なんか」と発話した後、「席を取られてしまった女性」を語りの中に新しく登場させている。ここで「女の人が」と続けているが、24行目でもう一度「若い、20代後半ぐらいの女の人が」と言い直しているのが分かる。その後、28行目で再び「なんか」と発話し、自分の座ろうとした席について述べた後、30行目では、その突然現れたその女性に席を取られてしまった事実を語り、32行目では「あ、取られちゃった」とその時の感情を直接話法で表現している。

このように、「なんか」の後に話し手は新情報を述べる傾向がある（内田 2001）。Chafe (1994)によると、思考の流れを言語化する際に、新情報を言語化することは大きな認知コストを要するという。また、聞き手も新情報を理解するために同様の認知コストを要することも指摘している。語りを進めていく中で、新情報をどのように示すかは、話し手にとって重要な問題である。この

点において、「なんか」の使用は、先行研究で指摘された個別の機能を当てはめてその働きを考えるより、むしろ、Chafe (1994) が述べるように、情報を産出するためのコストがかかるため、これから話されることが新情報であることを示唆する手段として発話されていると考える方が妥当であろう。

さらに、事例1で注目すべきは、出来事に対して、話し手Rの「心の声」の言語化（7、9、18、20、32行目）が頻繁に行われているという点である。この部分は、「～とか」、「～と思う」といった「～と」が受ける形となっている。このような形式について阿部（1999）では、「実際に音声として表れたものではなく、話し手がイメージとしての言語的音声を頭の内部で並べたもの」とし、「心内発話」と呼んでいる。また、森山（1997）では、同様の発話を「心内語」と呼び、「話し手の心の中で独り言のように浮かんだことば」と述べている。話し手が自分の心の中で思ったことを直接話法で発話することで、出来事に対する率直な感情や、感覚を端的に表現していると言えるだろう。また、言いよどみ、言い換えなども観察され、話し手が過去の出来事を想起しつつ、即興的に語っている様子が伺える。

次の事例2でも、事例1と同様、出来事の中で新情報が現れる際に「なんか」が使用される例が観察される。また、「なんか」と共に第三者が過去の場面で発話した内容が、話し手によって引用される例も見られる。

事例2：話し手Rは海外で食事をしているときに、韓国人の女の子と仲良くなり、その子から他のグループ（韓国人の男性たち）がRと話をしたいと言っていると伝えられた場面を思い出しながら語っている。

- 01R: **なんか**、その**なんか**、飲み屋にいったときも [一
 02L: [うん
 03R: そのかんこ、友達が [韓国人の女の子で
 04L: [うん、うん =
 05R: =その子はわたしたち日本人グループと [仲良くて
 06L: [うんうん
 うんうん =
 07R: =でまた、別に、全然関係ない、韓国人の男の人が二人で来てたん [だけど
 08L: [うんうん
 →09R: **なんか**一、まあ、同じ韓国人同士で、ま、ちょっと話し [てて
 10L: [うんうん
 →11R: そしたらその一、女の子がわたしたちに一いや、向こうの [なんか] ナイスガイたちが
 12L: [うん
 →13R: なんか あなたたちとしゃべりたいって言ってるから、話してあげてよみたいなこと 言われて一あーまあそういうふう に言われるなら みたいに思って

(J06 : 144-158)

話し手Rは1行目で「なんか」を二度発話し、出来事の場面が「飲み屋」であること（新情報）を聞き手に伝えている。3行目では友人が韓国人であることを伝え、先に「そのかんこ」と一度発した後、「友達が韓国人の女の子で」と言い直しながら、この話の登場人物を説明している。9行目では、韓国人の女の子が、韓国人男性グループと話をしていたという、今回の「びっくりしたこと」を語るための特定の状況（韓国人同士でおそらく意気投合し、話し手Rについての話もされていると考えられる状況）を新情報として語っている。そして11行目では、韓国人の女の子が初対面の男の子たちを指して、「なんか」と発話し、「向こうのナイスガイたちが」と続け、13行目で、「あなたたちとしゃべりたいって言ってるから、話してあげてよ」とRに伝えてきたと発話している。ここでは、Rが韓国人の男性たちから「話をしてみたい対象」として見られたという内容がR本人から語られているため、「こんなようなことを言われたから…」と出来事に対する消極的な気持ちを表現していると思われる。そのような状況をRは第三者の発話したことを引用し、「なんか」を用いて「あなたたちとしゃべりたいって言ってるから、話してあげてよ」と表現している。また、同じ13行目の最後の部分では、「あーまあそういうふうに言われるなら」と発話していることから、自分からそのようなことは言いにくいというメタメッセージをRは示していると考えられる。つまりRは、「なんか」と共に第三者の発話やその時感じた心の中の発話を使って、新情報を示しつつ、話しにくい内容に対する躊躇や、消極的な気持ちを伝えていくと思われる。Rは「こういう話をするのは少し、恥ずかしいのだが」といった心の内を「なんか」を使って表現していると言えるだろう。この例で「なんか」と共に表現された第三者の発話の引用部分は、その出来事が起こった時に、確かにその第三者が語った内容ではあるが、一語一句その通りとは限らない。内容は概ね同様であっても、話し手が自分のびっくりした体験を語る中で、再構築した発話と言えるだろう。それは出来事が起こった時、誰かから言われたこととして一度話し手の記憶の中に入り、そして時間が経って思い起こされるときに再び発話されるという意味で、事例1において観察された話し手の心内での発話と類似した特徴を持っていると考えられる。

話し手の心内発話の言語化、第三者の発話の引用に加え、次の事例3では、話し手が「なんか」と共に、出来事の情景をオノマトペで表現している例が観察される。

事例3：話し手Rは自転車に乗って学校から自宅まで帰ろうとしているときに、他の自転車と曲がり角で衝突をしそうになったという話をしている。

- 01:R: あるある、**なんか**、この前ね、学校から帰ろうと思っ [て
 02:L: [うん=
 03:R: =ちゃりだったん [だけど
 04:L: [あー
 うん
 →05:R: ちゃりをこいで、**なんか**、けっこうさっそうとさーって行ったん {笑い} さーてま、
しゃーって曲 [がってったら
 06:L: [うん

- 07:R: カーブで向こうからもチャリが来てて
 [たぶん、たぶん、向こうも学生 [ぼかった、男の人だったけど
 08:L: [びっくりする
 09:L: [うんうんうんうんうんうん
 10:R: きーってなって、お互い、うーってなって、うーってよけて {笑い}、
 あ、すいませんでな
 11:L: [すいませんでな
 12:R: {笑い} そういうびっくりもあり {笑い} [あった
 13:L: [{笑い} あーあ

(J20 : 140-155)

1行目で、話し手Rは「あるある」と自分が話そうとする内容が浮かんだことを聞き手に伝え、「なんか」と発話した後、新情報としてその出来事が学校からの帰り道でのことであったことを提示している。その後、自転車に乗っていた情報を聞き手に示した後、5行目で「なんか」と共に、「さーっ」、「しゃーっ」とオノマトベを用いて、臨場感あふれる様子を語っている。Rは自転車に乗って、風を切って走る様子を「さーっ」と表現し、また角を曲がる様子を一度「さーっ」と発話したが、正確に相手に伝わっているか、うまく表現できているかという点で不安があるのか、言い換えて、「しゃーっ」と表現している。オノマトベはRのイメージから作り出されているため、Rは、自分の心の中にある情景を表現するために、「正確な表現ではないかもしれないが、このような感じ」と、表現の不確かさを伝えようと「なんか」を加えていると考えられる。聞き手もそれに対応するように、「うん」(6行目)と頷きながら会話に参加している。その後も10行目でRは「相手と衝突しそうになった」状況や「衝突しないようにお互いを避けた」様子を、「きーっ」「うーっ」と表現している。これらのオノマトベは、どのようなことを表現しているのか明確とは言えず、一見不確かな表現とも思えるが、聞き手はそこから状況を理解しているようであり、同調するような発話を行っている。さらに、会話参与者間には何度も笑いが起きており、和やかなムードの中会話が進行していることが確認できる。

事例3で見られた不確かさを示す「なんか」は、同様に次の事例4でも観察される。

事例4：話し手Rは、オーストラリアにホームステイしたときの出来事を話そうとしている。

- 01:R: うー、あーじゃーね、最近じゃないんだ [けど
 02:L: [うん
 03:R: あ、いいのかな、最近じゃなくっ [ても
 04:L: [うん、たぶん大丈夫だと思う
 →05:R: **なんか**わたしが去年の、な...2月に [、オーストラリアに行ったんだけど、ホームステイで
 06:L: [うん

(J06 : 94-99)

ここでは、びっくりしたことについて何を話そうかと参加者二人が話し合った後、Rが1行目で「最近じゃないんだけど」と述べ、さらに3行目「いいのかな、最近じゃなくても」と発話した後に、自身のホームステイの話を導入しようと、5行目で「なんか」を使って話し始めている。今回使用した全てのテータの中には、新しいエピソードを話し手が始める場面で「なんか」が使用される場合、話し手は「これから話す自分の話が正しいかわからない」、「こんな話でよいだろうか」、といった前置きの発話を行う例が多く見られた。これから話す内容がうまく聞き手に伝わるか、聞き手の満足を得られるか、といった不確かさへの躊躇やためらいが、話し手の「なんか」の使用に関わっていると考えられる。

5. 考察

5.1 「なんか」と共起する表現とその働き

上記4つの事例において、「なんか」は新情報を提示しながら語りを導いていた。また、共起する表現として以下のようなものが見られた。

事例1 話し手の心内発話

事例2 話し手が耳にした第三者の発話

事例3 体験した事柄の動きや様子を表すオノマトペ

事例4 発話内容の不確かさに対する躊躇の表現

事例1では、直接話法で表れた心内発話が「なんか」と共に発話されていた。この心内発話は、出来事に対する率直な感情や感覚を端的に表現しながら、臨場感あふれる語りを聞き手に提供することに貢献していた。心内発話は、実際に音声として表れたものではなく、話し手がイメージとしての言語的音声を頭の内部で並べたもの（阿部 1999）であることから、直接話法で表現された発話が、過去の出来事で発話された内容と必ずしも同じものではないという点で、そのような表現の不一致に関して、話し手は不確かさを感じ、「なんか」を発話しているものと考えられる。

事例2では、話し手が感じたことや第三者の発話を直接話法で端的に表現する場面で、「なんか」が観察された。第三者の発話を引用することは、他者のことばを報告することにとどまらず、皮肉や共感など、今話している話し手の表現態度と共に表すストラテジーとして用いられることが指摘されている（伊原 2017）。この例において、話し手は「なんか」を用いて、出来事に対して消極的であるという認識を聞き手に伝えていた。

事例3では、出来事的情景がオノマトペで表現される場面で「なんか」が発話されていた。オノマトペの使用は日本語の語彙体系を特徴づける特色の一つでもあり、日本語では特に、動作などがオノマトペで形容され、臨場感のある表現となることが多い。オノマトペには、「（話し手の）経験の生き生きとした質感を呼び起こす（Kita 1997）」、また、「聞き手の心にイメージを起こし

やすく、直接訴える力が強い（牧野 1996）」という特徴がある。話し手は出来事のイメージを伝えるためにオノマトペを使っているが、そのイメージが聞き手に伝わっているかといった懸念から、「なんか」を用いて「正確ではないかもしれないが」といった意味を付け加えていると推察される。

事例4では、話し手がエピソードの開始の場面で不確かさや躊躇を感じる場面で「なんか」が発話されていた。これから話す内容が、うまく聞き手に伝わるか、聞き手の満足を得られるかといった、話し手の認識を示す表現が「なんか」と共に示され、その結果、それらは聞き手に、話し手の謙虚な気持ちの現れとして受け入れられていると考察できる。

これらの共起表現はすべて、出来事を詳細に述べることに寄与し、また、出来事の内容や情景、感情や感覚までも端的に、印象的に表すことができるという特徴を持つものであった。「なんか」はディスコースの中でこれらの表現を導きながら、語りを駆動させる働きを持っている。また、話し手は新情報を示しながら、エピソードを語っていくが、その中でどのような表現がよいか、どの順番で話をするべきかという問題に常に向き合っているようである。時にそれは認知的な不具合をもたらし、言いよどみや修復など、明瞭ではない表現となって生じる。話し手はそれらの表現の不確かさから、ためらいや躊躇などを聞き手に示すとき、「なんか」を用いていると考えられる。

5.2 「なんか」の発話される場面：即興性

上記4つの事例において、「なんか」の発話される場面には、いくつかの特徴が見られた。

一つ目の特徴としては、「あらかじめ準備された内容を語る部分ではない」環境において、「なんか」が用いられているということである。話し手が経験を思い出しながら話す場面では、正確な情報を聞き手に提供できなかつたり、スムーズに時系列で話せなかつたりすることが頻繁に起こる。本稿では、「びっくりしたこと」について語るデータを使用しているが、参与者二人は初対面であり、収録直前にテーマを与えているため、事前に会話の内容を計画立てておくのは不可能である。話し手はこのような状態であるため、言いよどみや、言い間違いを起こすことも多い。そしてそこから、躊躇や恥じらいの気持ち、説明の不確かさといった不安が生まれ、元々不確かさを語源的意味に持つ「なんか」を、聞き手との間のコミュニケーションの一助として発話していると考えられる。つまり、「なんか」が発話される際には、「完全に正確ではないかもしれないが、内容を伝えようとしている。」ということを示しながら話を進めようとする場面が存在するという点である。

二つ目の特徴としては、出来事を語っている話し手は、「発話の順序や正確な語の選択といった型に捉われない」環境で、「なんか」を用いているという点である。時系列での語りがないこと、また、言いよどみや言い間違いが観察されることは、その発話形式が自由で、型にはまらなかったものでないことを意味している。データを振り返ると、「なんか」が発話される場面は、自由で、和やかなムードで行われることが多く、話し手が「なんか」と発話すると、聞き手があいづちを打ったり、「うん」と答える様子が度々見られるなど、円滑に相互行為が行われている。また、笑いが起こることなどからも、総じて、会話を楽しむ雰囲気があることは明らかである。自由な

形式の中に、不確かさなどの要素が生じる際には、話し手はそのためらいや躊躇を「なんか」を使って聞き手に示しながら、語りを駆動させている。聞き手もまた、「なんか」によって示唆される話し手のためらいや躊躇を受け取り、共に会話を作り上げるという行為に参加している様子が度々見られる。このように「なんか」の使用には、自由な、形式に捉われない環境が必然的に関わっていると言えるだろう。

このように自己開示場面における「なんか」の使用には、型に捉われず、その場で自由に作り上げ、創造的に語るという即興的な特徴が見られる。話し手は、創発された出来事を表現するために、心内発話のような表現を導き、聞き手に臨場感あふれる情景を連想させている。また、聞き手からも即興的な関与が見られ、その時、その場の雰囲気に従って、うなずきや応答など、言語的・非言語的な要素を話し手に示している。「なんか」は、このような即興的なやりとりを成立させるために重要な役割を持つ語であると考察することができる。

6. 結論

自己開示場面において発話される「なんか」は、新情報を示しながら語りを先導している。また、話し手の心内発話などと共起し、臨場感あふれる表現を用いて会話を展開させている。さらに「なんか」は、過去の出来事をその場で思い出しながら語るという即興的な場面において、「自分の話そうとする話が、このようなものでいいのだろうか」といった躊躇や、「正確ではないかもしれないのだが」といった不確かさなど、多様な語用論的意味を聞き手に示している。このような点から、従来、フィラーとして取り上げられることが多かった「なんか」は、単に発話と発話を埋めるための語ではなく、語りをその場で作り上げ、駆動させながら、話し手の認識を付加するという、コミュニケーション上の重要な働きを担う語と結論づけることができる。

文字化の記号

[オーバーラップ
{笑い}	笑い
太文字	「なんか」が発話されている箇所
<u>下線部太線</u>	「なんか」と共起する表現
<u>下線部点線</u>	言いよどみ、言い直しなどの言語学的特徴
=	瞬時の応答

参考文献

- 阿部二郎. 1999. 「いわゆる心内発話について－発話動詞として見た「思う－」』『筑波応用言語学研究』 6. 85-100.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time*. The University of Chicago Press.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. Arnold (second edition).
- 伊原紀子. 2017. 「コミュニケーション・ストラテジーとしての想定引用」『社会言語科学』 19-2. 27-42.
- 飯尾牧子. 2006. 「短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察」『東洋女子短期大学紀要』 38. 67-77.
- Kita, Soichiro. 1997. Two-Dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics. *Linguistics* 35. 379-415.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』アルク. 140-151.

- 森山卓郎. 1997. 『『独り言』をめぐって－思考の言語と伝達の言語－』『日本語文法：体系と方法』川端善明・仁田義雄編. ひつじ書房. 173-188.
- 鈴木佳奈. 2000. 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化』9. 63-75.
- 田窪行則・金水敏. 1997. 『応答詞・感動詞の談話的機能文法と音声』くろしお出版. 257-279.
- 内田らら. 2001. 「会話に見られる「なんか」と文法化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか?」『東京工芸大学工学部紀要』人文・社会編24(2). 1-9.

辞書・辞典

- 大辞林. 第二版. 1999. 三省堂.
- 日本国語大辞典. 1975. 第15巻. 小学館.

注

- (1) 即興は「その場の情景・出来事などに感じて起こった興味」、「興にのって、即座に詩歌・楽曲などを作ること」と説明される（大辞林第二版1999）。
- (2) ミスター・オー・コーパスは「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」をもとに、科学研究費基盤研究B、No. 15320054（研究代表者 井出祥子）の助成を受けたものであり、日本女子大学にて収集。すべては、DVDに収録され、文字化されている。このデータコーパスは、言語・文化における異言語・文化間比較を可能にするために収集されたものであり、コーパスは、(1) タスク（課題達成相互行為）、(2) 一人語り、(3) 話、の三部構成からなっている。

(2017年 日本女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程後期 2年)